
リアル スター

あげは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアル スター

【Nコード】

N9044Y

【作者名】

あげは

【あらすじ】

芸能人に関わってはいけない。そんな変な決まり事のある家に育った麻里亜まじあ。それなのに、人気俳優と出会ってしまった…！？以前、途中まで別のサイトで書いていたのですが、こちらで完結まで頑張ってみたいと思います。

運命の土曜日

いつもと同じかと思っていた土曜日。
変調は突然やってきた。

カランコロンと、玄関のベルの音が鳴る。
いつもなら、すぐに「いらっしやいませ〜」と従業員の声がかかるのに、今日はその前に店内がザワついた。

「ねえ、もしかして……!?!」

「嘘……!?!」

従業員もお客さんも、皆が口ぐちに何かを言っている。

……何？

あたしはテーブルを拭く手を止めて、顔をあげた。

あたしの名前は佐藤^{さとう} 麻里亜^{まじあ}。

カフェ BUTTERFLY でバイトする高校3年生。

普通の……

うっん、ちよっと普通じゃない高校生。

まあ、その話はおいおいするとして……。

うちのカフェは女性に人気で、店内の9割が女性。
そのほとんどのお客さんが騒いでるって……一体、何事!?

お客さんのヒソヒソ声に囲まれながら、あたしはお客さんたちの視線の先を見た。

それは店内の入口付近。
今、入ってきたお客さんたちだ。

男が3人。

なぜか動かない他の店員の代わりに、店長が慌てて玄関に行つて、席に案内するところだ。

女性客が多くて男性客が目立つ店だけど、こんなに騒がれることは初めてで、わたしは首をかしげた。

……イケメンなのかな？

あたしの位置からはあのお客さん達の後ろ姿しか見えないけども、理由としてはそれが妥当な気はする。

そうだとしても、店内中の女が反応してるのは、ちょっと異様だよね……？

あたしは席に座る男たちをぼんやりと眺めていた。
すると、「佐藤さん」と店長に呼ばれて、我に返った。

「はい？」

手招きされて、バックヤードへ向かった。

「なんですか、店長？」

店長はおそろしいほどのニコニコ笑顔でわたしを待っていた。
接客業なんだから、いつも笑顔は当たり前。
時には作り笑顔と感じてしまうほどの120%全開の笑顔にも見慣れる。

でも、この笑顔は……200%全開？
怖いくらい不気味で、あたしの笑顔も引きつってしまふ。

「悪いんだけどさ」

「はい」

「今、入ってきたお客様のテーブルには佐藤さんがついて」

「は!？」

あたしは目を見開いて、大きく聞き返してしまった。

この店はテーブルごとに担当が決まっていて、あたしはあのテーブルの担当じゃない。

あそこは恵美^{えみ}さんが担当だったはずだ。

そう思つて、恵美さんを視界から探したら

彼女はぼつと一点を見つめてた。

熱にうなされたような眼差し。

その先にいるのは、あのお客さん達。

何かなんだかわからないけど、恵美さんが仕事にならないことわかった。

「わかりました」

あたしはため息をつくとき、お水とおしぼりに乗せたお盆を持って、テーブルに向かった。

「いらつしゃいませ」

あたしは笑顔でお水を置いた。

皆が騒ぐ客とはどんな客なのか！
すっごく気になって、男たちをこっそりと観察してみた。

一人は、店の中だというのに、野球帽を目深にかぶったまま。
顔は見えない。

Tシャツにジーパンというラフな格好だ。

ジーパンを腰ばきしていて、いかにも若い男という印象。
もしかして、同じ年くらいかな？

もう一人は、茶髪にサングラス。

サングラスの色が黒に近くて、目が見えない。

当然、顔はわからないけど……イケメンな気はする。
顔の骨格や鼻、唇の雰囲気がかっこいいような……。

服装は白と薄青のストライプシャツに、黒のパンツ。

さっきの少年よりも落ち着いていて、こっちはたぶん大人の男だ。

そして、最後は……。

あたしは残った男も見て、呆れた。

この3人組、顔を隠さなきゃいけない理由でもあるわけ？

野球帽少年と茶髪男の向かいに座る金髪の、一番目立つ男。

ソイツもまた、暗い色のサングラスをかけていて、顔がわからない。

なんなの、コイツら……。

自分の笑顔がまた引きつってしまっ。

だっ。

普通、お店の中では帽子もサングラスもとるでしょ!？

「店内では取りなさいよ！」って言ってやりたい気持ちをも、必死にこらえる。

金髪男の服装は、黒のシャツにジーパン。
ラフな格好のほずなのに、安っぽく感じないのはなんでだろう。
ブランド物のお高いジーンズだとか？

金髪男の髪の毛も、派手に染めてるわりには、綺麗。
髪の毛が傷んでない？

その辺のヤンキーの金髪とは違う気がする。

それにしても、この3人は何者なんだ…。
あたしはそればかり気になってまう。

皆が3人に注目した理由はよくわからないけど、なんか納得だよな。
オーラっていうのかな？
普通じゃないものを感じる。

顔が見えなくても、たぶん3人ともモテるイケメンで、華やかで。
あたしはそんな疑問を感じながらも、頭を仕事に切り替えた。

「ご注文はお決まりですか？」
「オレね、オムライスランチ！」
「はい、オムライス…」
「あっ」

野球帽の少年が言ったオーダーを繰り返そうとしたら、その少年自ら遮ってきた。

「やっぱりパスタランチも捨てがたいな。ハンバーグランチもいいな」

「おまえ、それ、全部だろ」
茶髪男のツツコミに笑いかけた。

この店のランチは3種類。

オムライス、サラダ、スープ、ドリンクのセットのオムライスランチ。
パスタ、パン、サラダ、スープ、ドリンクのセットのパスタランチ。
ハンバーグ、ライス、サラダ、スープ、ドリンクのセットのハンバーグランチ。

つまり、少年はすべてのランチで迷ってることになる。
優柔不断な男だなあ。

「レンはよく食べるから、ハンバーグにしとけば？」
「一番、ポリウームありそうだよね」
金髪男、茶髪男の順に言った。
その言葉に、何かが引つかかった。

「……………レン？」
思わず、つぶやいた。
すると、金髪男が初めてあたしを見た。

ゴクリと息を飲む。
な……………何？
金髪男はなぜか、あたしを凝視していた。

サングラス越しに薄く見える瞳がこちらを見ている。
その視線を痛いほど感じる。

その時、野球帽の少年がわたしに向かって言った。

「……佐藤？」

「は、はい」

その拍子に、ようやく金髪男からの金縛りが解けた。

野球帽の少年が帽子をあげて、あたしを見ている。

その顔には見覚えがあった。

さっき感じた引っ掛かりってコレだったんだ。

「オレだよ、オレ！ 同じクラスの蓮条ねんじょう！」

そう言いながら野球帽を取った彼は、短い黒髪と二重の大きな瞳、まっすぐな眉で、はにかんだ笑顔を見せた。

彼はクラスメートの蓮条 まこと 真。

クラスでも真ではなく、レンって呼ばれていて、金髪男がレンと呼んだ名前にピンときたんだ。

「なんだ、蓮条だったの」

あたしは肩の力を抜いて、微笑んだ。

店内にいる多くの女性から熱い眼差し。

それらを受ける男たちの正体が気になっていたあたしは、その一人がクラスメートとわかって、理由もわかった。

だって、蓮条はただのクラスメートじゃない。

蓮条は。

「何、何、レン。この店員さんと知り合いなの？」

茶髪男が興味津々という風で話しかけてきた。

サングラスをずらし、直にわたしを見てくる。

……やっぱり。

この人もイケメンだ。

あたしよりも5歳は年上の20代の男。

少年の雰囲気が残った、クルツとした愛嬌のある瞳だ。

蓮条は茶髪男に向かって頷いた。

「クラスメートなんです」

「へえ！ 仲いいの!？」

「そうですね。佐藤も演劇やってるから、わりと話す方も」

「……ちよっと、蓮条!」

あたしは焦った。

何、人の秘密をポロリと言ってくれてるの……!？

たしかに、あたしは演劇をやってる。

でも、それは訳あって、誰にも内緒なんだ。

蓮条は、あたしが演劇を始めるキツカケに関わりがあって、知っているだけ。

そうでなければ、蓮条にだって言えない。

秘密は人に言った時点で秘密じゃなくなるから。

誰かに言ってしまったら、どこから誰に漏れるかわからない。

そんなわたしの複雑な思いには気づかないまま、茶髪男はキラキラと瞳を輝かした。

「佐藤さんも演劇してるの？ てことは、どっかの劇団か芸能事務所かに所属してるってコト!？」

その瞳を見ると、むげには扱えない何かを感じて、あたしは困った。

「…あ、あの！ オーダー！ わたし、仕事なので私語はちょっと……。オーダーをお願いします！」

「えっ、あ、えーとね……」

茶髪男はガツカリした表情で注文をした。

その表情に申し訳なく思いながらも、その後、料理を運ぶ以外でそのテーブルに近づかないように仕事をした。

夕方4時に仕事が終わり、あたしは裏口の扉を開けた瞬間、固まった。

なんで？

どうして……？

扉の向こうには、蓮糸をはじめとする、あの3人組の男が立っていた。

ランチタイムの終わりに入店した彼らだけど、さすがに1時間も経たずに席を立った。

それから、2〜3時間。

ずっと外で待ち伏せていたの！？

あたしが何時上がりか知らないだろうに……。

裏口は店内からは見えないようになってるので、待たれているなんて、全く気づかなかった。

大通りではなく、人通りの少ない小さな道に面してるから、騒がれ
もしなかったのかもしれない。

「よかったー。わりとすぐに出てきて」
「え？」

茶髪男がにっこり笑って言ったことに、思わず、耳を疑った。
2〜3時間は待たはずなのに、すぐになって……一体、何時間待つ
気だったって言うの。

呆然と茶髪男を見上げていたら、いきなり、ガシツと腕を捕まれた。
「ええ!?!」
な、何……!?!?

「もう少し話したいって思ってたんだ」
「は、話……!?!」
歩きだした茶髪男に引きずられるようにして、あたしは男に向かっ
て問い返した。

もう……何なわけ?
急な展開に、頭がついていかない。

チラツと横を見ると、蓮条と目があった。
蓮条は片手を顔の前にやって、口パクで「ごめんね」と言ってる。

ご、ごめんねって……
謝るくらいなら、最初からこんなことしないでよー!!

と思うけども、そんなことも言えず。
あたしは最後の頼みの綱とばかりに、金髪男を振り返って見た。

だけど、金髪男は一瞬、あたしに視線を向けたかと思うと、後はすまし顔。

どうやら、あてにはできないらしい。

あたしはガツクリと肩を落とした。

運命の土曜日（後書き）

始めてみました。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9044y/>

リアル スター

2011年11月27日01時52分発行